

cue

04



特集
木から床へ



床の記憶
MESSAGE FROM FLOORS.

44

仕事で毎日バタバタしていた。
ある夜、床を雑巾掛けしている夢を見た。
次の日、何故かすこぶる体調が良かった。

特集

木から床へ

住宅の「床」。我々メーカーの人間は毎日意識していますが、皆さんが普段の生活で特別に意識することは少ないだろうと思います。しかし、何気なくその上で生活している「床」が生まれてくるまでには長い物語があります。今、お住いの家の「床」が天然木フローリングであれば、そのあなたの家の「床」の物語は数百年前にまで遡ると言っても過言ではありません。世界の裏側で数百年前に芽を出した樹が成長し、長い年月をかけて唯一無二の木目をつくり、今あなたの家の「床」となっているのです。

今回は、遠く離れた国の森で育まれた「樹」が「木」となり、日本に渡り、そして、天然素材ならではの個性（キャラクター）が活かされた「床」へと生まれ変わるまでの物語をお届けします。

選木

もくしょう 木匠に見出される適正

丸太の選別基準
買付しない(ハネる)基準の代表例



色が悪い(この場合は黒い)



ガマ割れ



巨大入り皮形成中



虫穴

床材の顔となる表面化粧材には、美しい木目を持つ世界中の銘木が使われます。「銘木商」を起源とする当社の最大の特徴は、その化粧材の原材料となる原木からの一貫生産です。当社には銘木商のDNAを受け継ぐ、森と木を知り尽くした匠、「木匠」がいます。木匠は、いい樹を継続的に調達するために、森の健康状態や管理具合をみるべく年間100日は世界の森を歩いています。

樹木はその生育期間中に複雑な環境の影響を受けながら成長をしており、生育地の地形、土壌条件、気候条件などの総合された立地条件による特徴がその材質に現れます。例えば、石灰質の土壌などに生育している樹木は、著しく生育が悪く欠点が多いなど環境が木に与える影響は大きく、また、成長過程でもいろいろなアクシデントがあり、それが木に痕跡として残ります。鹿や熊に傷をつけられたり、濁流に洗

われたりした傷跡は、新しい樹皮で覆われます。ここをうまく加工するとバークポケット(入り皮)となっておもしろい表情に現れます。

切り出された原木は、枝や梢を切り落とす「枝払い」、そして状態や用途に応じて長さをカットする「玉切り」を行います。玉切された一番根元側の部分である「元玉」は、節が出にくいために高値で取引されます。大きなキャラクターを入れたラステイックな表情を求める場合は、あえて末側の枝の多い部分や小径木を使います。

原木の買い付けは、たくさんの丸太が並べられたログヤードで行います。木匠は、魚市場のマグロのように並べられた数百本の丸太を表面と木口から判断して、1本1本吟味しながら、その木の行く末、その木の用途を思い描きながら買い付けを行います。



北米の森



ヨーロッパの森

個性

木の成長が生むキャラクター

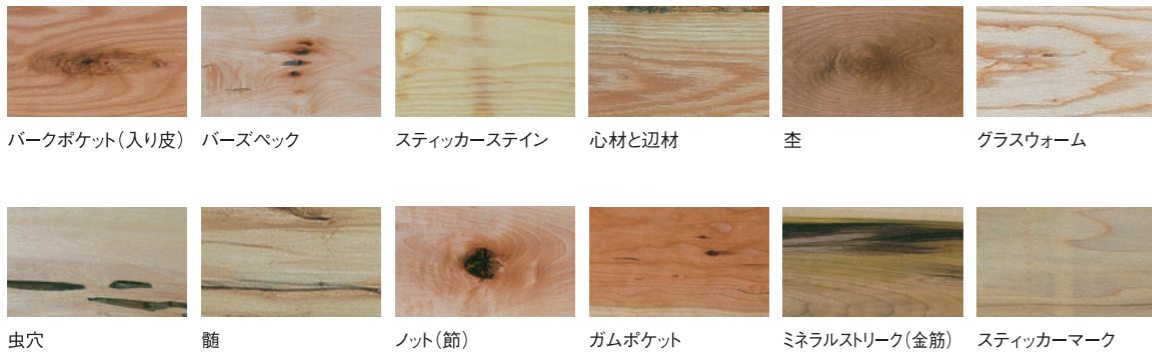
木材は、天然素材であるがゆえに様々な特性を持っています。それを理解し用途に応じて使い分けていく必要があります。そのため、木材は製材工程で製材を格付け分類します。当社は床材に多く使用しているアメリカ広葉樹にも様々なキャラクターが現れます。樹種特有のものもあれば、どの樹種にも共通して見られるものもあります。

例えば、どの樹にも現れる「節」は枝があった跡。枝は、木の成長にはなくてはならないもので、節はこの木が生きてきた証といえます。節は、木材の幹が太くなる過程の中で枝の元の部分が幹の中に包みこまれることでできます。節には生節と死節があります。生節は、枝の元の部分が生きている間に幹の中に枝が取り込まれて出来たもので、幹の組織と枝の組織が繋がっています。死節は、枝が枯れた状態で幹に取り込まれたもので、幹の組織と枝の組織が繋がっていません。従来、欠点とされていた節は、活かし方によって木の持つ自然な表情を演出するアクセントになります。

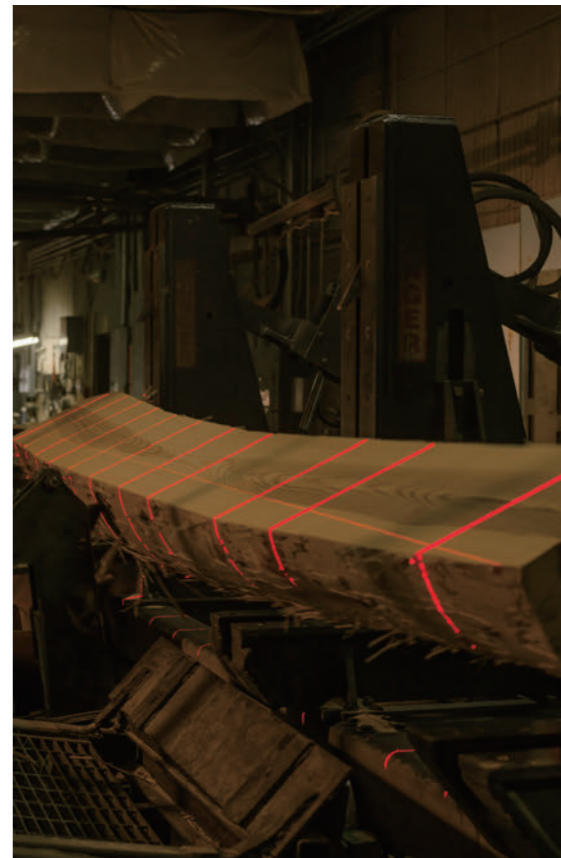
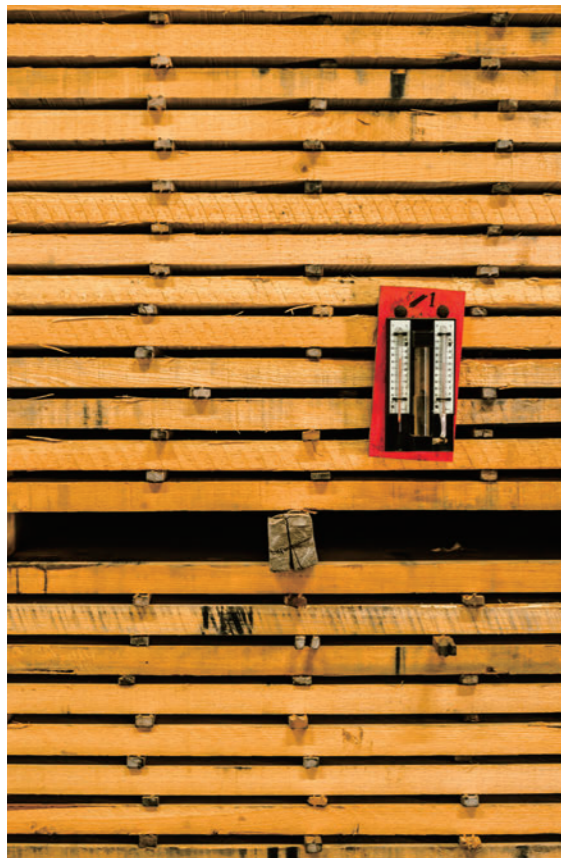
製材の木取りによって変わるこれらのキャラクターと木目をどのようにコントロールするか。後の工程にある木組みデザインにおいてクラフトマンの腕が問われるところです。

アメリカ広葉樹に表れる様々なキャラクター

(写真協力:アメリカ広葉樹輸出協会)



ブラックチェリーの丸太断面。年輪によって現れるガムポケット(樹脂痕)。



木を扱うのは水との戦い

グレード別にわけられたランバーは、積み上げられ、乾燥されます。広大な敷地に高く積み上げられたランバーの量には、圧倒されます。樹種によって変わりますが、北米のブラックチェリーやブラックウォルナットは約3ヶ月、ヨーロッパのオークなどは6ヶ月から1年ほど掛けて含水率を落とします。その後さらに乾燥庫に入れておおよそ10%程度の含水率まで持たせていきます。実は、この乾燥の度合いが木材の品質において非常に重要になります。木が反ったり縮んだりするのは、木の水分の蒸発のためです。木と水の原理をいかに理解してコントロールするかが、木材製品を扱う上でのポイントとなります。

乾燥工程を終えたランバーは再度選別を行い、日本へ向けて出荷されるカッターストックとなります。

乾燥

原木の個性を活かす

買付けた原木はそのまま日本へ輸入して当社で製材する場合と現地で製材する場合があります。製材は、木口や側面から、年輪、節、芯の目合いなどを見極め、更に板目、柱目の木取りを考えて、丸太に鋸を入れます。熟練工の鑑眼と素早い判断、的確な鋸入れが問われる工程です。

アメリカ現地で大割りされたランバー(板材)は、グレーディングの工程に進みます。ベルトコンベアの上を流れる材の材面を確認し、グレードを見極め、ペンで印を入れて選別していきます。この工程では、白太、赤身の程度、幅、欠点の程度など、当社向けの材料として、一般的な米国製材グレード+アルファの選別を行います。通常、一般的なアメリカの製材品の選別は、製材後の大まかな選別、次工程「乾燥」後の選別の2回です。それに対し、当社の場合(ライブナチュラルプレミアムのスタンダード品)は、原木の選別から数えて最終的に6回の選別を行います。これが、「アサヒ・スペック」と呼ばれる素材へのこだわりです。

製材



帯鋸刃の目立てをするスタッフ



プレーナーに投入するランバー材



大割工程前の丸太



バーカー（はく皮機）に投入される丸太



製材工場から出荷される材



幅カットの工程



木口に割れ止めの口を塗り、天然乾燥工程へ



丸太の検品をおこなうスタッフ

加工

いよいよランバーが日本に運ばれてきます。ランバーは当社の工場で小割され板子と呼ばれる角材になります。その板子を床材のデザイナーへ組み上げる工程を木組みと呼びます。この木組みが床材の意匠品質を決定づける極めて重要な工程となります。

キャラクターの入り方のバランスをとりながら、床のピースをどのように組み合わせるか。熟練の職人の手作業でしか出来ない素材の力、その木の魅力を引き出す要諦です。それぞれの木の持つキャラクターを活かし、感性に響くデザインを目指します。

挽き板、突き板として完成した化粧材は、合板をメインとした基材に貼り合わされ、実加工・溝加工を経て、塗装が施されます。そして、最終のチェックをクリアしたものが梱包されて製品として完成します。北米、ヨーロッパ、アフリカ、東南アジアといった様々な国で育った樹が床材製品として生まれ変わる瞬間です。

品質

当社の床材開発における試験項目は実に約70項目もあります。おそらくこれほどに多くの試験を行って床を作っているのは日本だけです。それは、日本が高温多湿な環境であること、そして靴脱ぎの文化を持つ国だからです。常に身体が直接触れる唯一の場所である床。隙や反りだけでなく足ざわりまで、製品の品質によって住み心地の満足度が大きく左右されます。

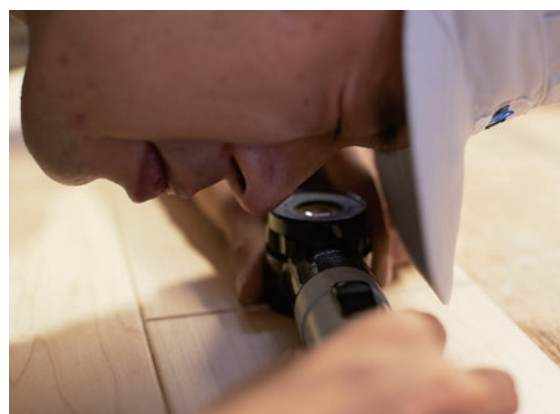
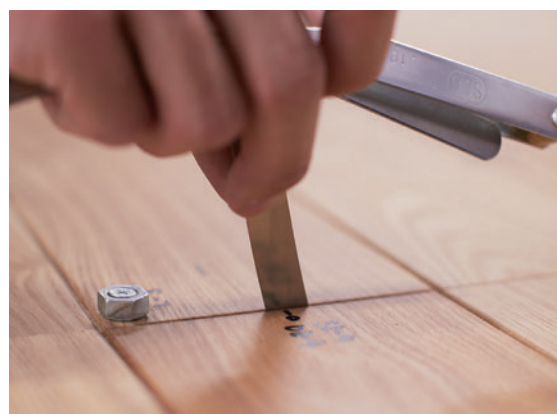
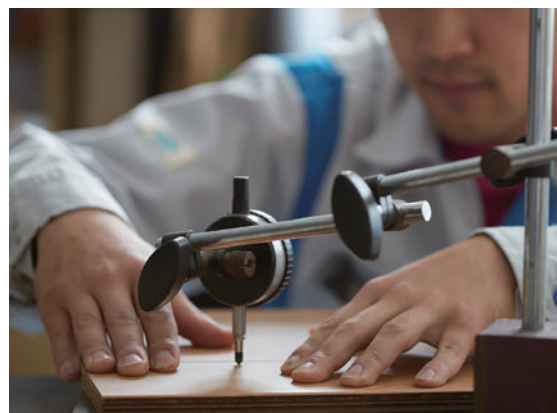
木が本来持っている素材の力を内面から目覚めさせる意匠性にこだわる一方で、気候の変化や床暖房による収縮を最小限に押さえ込む素材や構成での工夫、優しい足ざわりとメンテナンス性を両立する塗装や溝形状など、機能性にも徹底的にこだわります。

世界の森から届けられたせつかくの銘木を愉しむことができるのも安心して使用できる品質があつてのもの。だからこそ一切妥協はできません。

力強い木の感性を床に伝える



快適な暮らしを支える床



価値

時代が求める木の床の価値

遠い昔、最初の家屋には床がなく、住まいは土の上に屋根を掛けただけのものでした。土間の上に敷物を敷いて寝る場所をつくり、生活の全てがそこで行われていました。当時の家は、雨風を凌げる、ちよつと落ち着ける空間でしかなかったのです。その後、寝るための敷物が西洋ではベッドや椅子となり「居心地の良いスペース」としての「家具」へと進化していきます。一方、日本では、敷物が家具ではなく「床」になっていきました。土足文化の西洋の家では、「家具」を「落ち着けるところ」としたことに対して、日本では履物を脱いであがる「床」を貼ることで「落ち着くところ」を創りあげたのです。

「家に入って床を見るたびにホッとする。」
「今までと違う床に住んでみて初めて、床の大切さがわかりました。」
これらは、天然木挽き板のフローリングを採用された住まい手の生の声です。普段は意識されていなくとも、木の床が住み心地に大きく影響していることに、お客様の声からあらためて気付かされます。人が木に寄り添うと「休む」という字になるように、天然素材の中でも、もつとも人に心地よさを与えるのが木です。日本人が住まいの中の「落ち着くところ」として創った「床」に、人が最も安らぎを感じる「木」という

素材を使う。だから、日本人にとって「天然木の床」は、「心から安らげるところ」として家の中で最も大事な場所になるのでしょうか。

今、インターネットの世界では、ラスティックがトレンドとなっています。素材感の表現として出てきたラスティックスタイルですが、その背景には、テクノロジーの発展によってもたらされたストレスフルな社会環境や、モノの豊かさより心の豊かさが求められる時代における人々の価値観の変化などが関係していると思われる。

住まいのデジタル化が進み、生活がどんどん便利になっていく一方で、人が心から安らげる空間作りに、本物素材ならではの癒やし効果が、より求められるようになってきています。そのことが今のラスティックや素材感を求めるトレンドにつながっているのかもしれない。特に、日本人にとって住まいの「落ち着くところ」である「床」には、キャラクターを活かし素材の力を引き出した「天然木の床」が一層求められる時代になるように思います。

あなたの家の床が天然木の床でしたら、ぜひ、その素材である木が生まれた森へ思いを馳せて、そこから繋がる心地よさ、素材の力を感じてみてください。

【参考文献】

黒川雅之「デザインの修辭法 50 keywords」求龍堂 二〇〇六



知っていると役立つ
床のおはなし

床

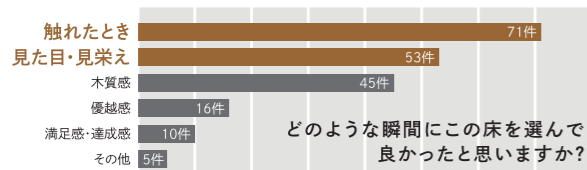
知っトコ豆知識

床選択の『意外な決め手』とは？



突然ですが、お施主様が床材を選ぶとき、何を一番重視されると思いますか？
例えばインテリアとの相性やご予算、或いは高級感といった要素がイメージされるかと思えます。
ところが実際に住宅を購入されたお施主様にアンケートを取ると、フローリングを選んだ決め手に「木質感」について「触感」に関わるお答えが多く見られます。さらに購入後、実際に住まれたのちに「採用されたフローリングを選んで良かったと思われるポイント」を伺うと、圧倒的に「触感」を挙げられる方が多数を占めています。
つまり、人が実際に手や素足で触れて初めて感じられる「肌ざわり」というものが、非常に大きなポイントとなっているのです。特に「素足で触れる事でのぬくもりがよく分かった」と仰る方はとても多く、床材という商品にとって実際に触れてみるのがいかに重要であるかを表しています。
お施主様に床材を提案される際は、カタログだけではなく是非一度ショールームに足を運んで頂き、実際に触れてみることをおすすめ頂ければと思います。

(文・田中)



当社Live Naturalプレミアムを採用頂いたオーナー200名へのアンケートより

朝日ウッドテックの銘木調達ネットワークは、現在世界15ヶ国。ヨーロッパ、北アメリカ、南アメリカ、アフリカ、東南アジアなどの原産地から23樹種を調達している。

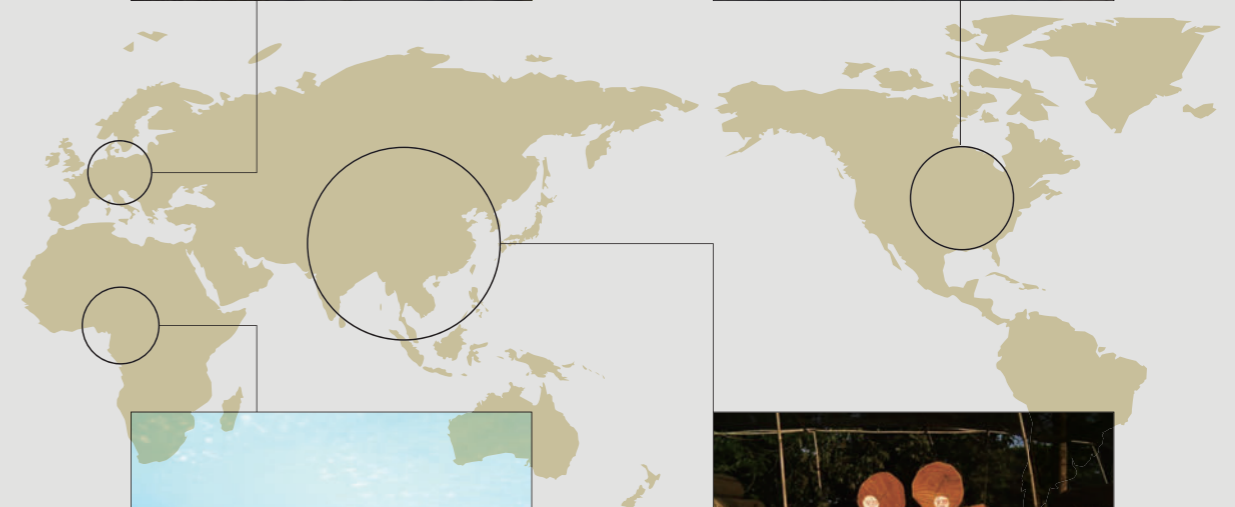
Europe

- Sycamore シカモア
- Oak オーク
- Beech ビーチ
- Sycamore シカモア
- Oak オーク
- Beech ビーチ



North America

- Black Cherry ブラックチェリー
- Hard Maple ハードメイプル
- Black Walnut ブラックウォールナット
- Birch バーチ
- White Ash ホワイトアッシュ
- White Oak ホワイトオーク



Central Africa

- Sapelli サベリ



Asia

- Bamboo 竹
- Teak チーク
- Karin カリン
- Mahogany マホガニー
- Acacia アカシア

TBS系ドラマ

「A LIFE ~愛しき人~」の 舞台裏——床と壁

2017年1月クールドラマで最も高い視聴率を獲得したTBS系日曜劇場「A LIFE ~愛しき人~」。舞台となった壇上記念病院の特別病室に、当社の床材 DESIGN PREMIUM / streamと壁材 And More銘木無垢壁材レリーフを採用頂きました。今回は、ドラマの撮影セットのスタイリングを担当された宮本太朗さんにお話を伺いました。

ドラマセットのインテリアスタイリングで心がけていることは。

ドラマのインテリアスタイリングの特徴は、時間の経過を表現する必要があるので。また、空間に特定の人や不特定多数が介在した感じを出すなど、そのドラマのシーンの主旨やコンセプトにあった舞台美術を作ることが大事です。セットと現実ではモジュールを意図して変える場合もあります。

今回の壇上記念病院特別室のコンセプトや
スタイリングのポイントがあれば教えてください。

今回は、神奈川県内の病院の特別病室を参考にしています。結論としては、病院とはいえど特別室の場合は、デザインの

自由度はかなり高いということがわかりました。その中で、テクスチャーは居心地の良さを記号として無垢の木というところに行き着きました。

当社の製品をご採用頂いた理由をお聞かせください。

現在、舞台美術の仕事以外に木製の家具に関わる仕事などもしているのですが、実は、私が木に深く携わるきっかけとなったのが、朝日ウッドテックさんの冊子なんです。「エッセンス・オブ・ライブナチュラル」という周年記念誌をもらって感銘を受けてから、機会があれば使いたいと考えていました。今回、テレビ局としても力の入ったドラマでもあったので、この機会にとオフアースさせて頂きました。

床材のデザインプレミアムstreamは、リズム感が直感的にいいなと思いました。また、デザインを手掛けたnendo佐藤オオキさんの「空間に速度を生む」というコンセプトに共感しました。普段からドラマセットのインテリアでは「時間の経過」を意識していることもあって、速度、時間のキーワードが心に響いたんです。壁材のレリーフは、デザインもあります。が、無垢でありながら安定感があるところですね。スタジオは結構乾燥しますので。

最後に一言お願いします。

今回使ってみて床の重要性にあらためて気付かされました。床の素材感は、思っている以上に意識の中に印象深く残るものだと考えています。これからも木や床の持つ力を舞台美術に活かしていきたいと思っています。

(取材:西村)



床材にDESINE PREMIUM / streamのブラックウォールナット、壁（左面）に銘木無垢壁材レリーフのブラックチェリー、ベッド上の天井には、ピーリングニューのタモを採用。



セットの壁面を外した様子。



宮本太朗氏にインタビュー。



「うち」「そと」「ひと」のある新しい住空間を提案するSHOP

住まいは、インドア空間とアウトドア空間が美しく調和し、家全体としてトータルコーディネートされてこそ、上質な空間が生まれる。住み手の感性に響く心地よさのある「場」「時」「憩」「緑」そして「人」をより豊かに育む力のある空間をプロデュースしたい、との想いから生まれた、「うち(家)」と「そと(庭)」をトータルデザインできるSHOP。インテリアは自然に調和する明るい基調をベースにウイリアムモリスの壁紙や、自然素材のハイブリッド珪藻土、フィボナッチ数列で並ぶ自然美のペンダントなど、長年愛着を持って使い続けられるものを選定する中で、床には本物志向で経年変化も味になる「Live Natural PREMIUM RUSTIC オーク」を採用。オンラインの個性を提案するSHOPなので、銘木の個性をドラマティックに味わえる点にも惹かれたとのこと。来場されるお客様からも好評で「この床の樹種は？」と聞かれることも多く、子どもたちも素足で歩きまわるほど気持ちが良いそうです。他の天然素材や植物との相性も良いオークの素材感が「うち」と「そと」をうまく繋ぎ、まさにコンセプトである「うち」と「そと」が響き合う上質空間を実現された物件でした。



Select vol.15

セキスイデザインワークス株式会社 SHOP「ザ・シーズン大阪北」
Live Natural PREMIUM RUSTIC オーク



小樽運河にて。
快晴で絶好の旅日和でした。

編集後記



慰安旅行で北海道に行きました。1泊2日の強行スケジュールで、初日は札幌で時計台、サッポロビール園&ジンギスカン、翌日は小樽でオルゴール堂と運河です。なんといってもサッポロビール園が良かった！ビールの歴史が楽しく学べて見学後のビールも美味しく最高です。もともとビールは黒ラベル派ですが、ますますサッポロが好きになりました。(西村)



今回写真掲載している白のプレジジョンベースは個人所有のものです。もう30年以上使い続けていて、木材も十分に乾燥しているので鳴りも最高の状態にあります。当時非常に高価だった為、購入するにはかなり迷いましたが、清水の舞台から飛び降りるつもりで36回ローンを組みました。これだけ長い間使い続けている事を考えれば、もう十分に元は取ったと思っています。(相原)



昨年この世を去ったデヴィッド・ボウイ。先日彼の回顧展に行って来ました。私とデヴィッド・ボウイの出会いは映画「戦場のメリークリスマス」。幼いながらに「なんだこの美しい人は！」ときめいた記憶が。音楽もファッションも不思議。どの時代を切り取っても前衛的で変幻自在なデヴィッド・ボウイの世界観に触れ、思いがけず感性を刺激されました。ボウイ熱・・・しばらく冷めそうにありません。(田中)

定期購読をご希望の方は、
「cue定期購読希望」とタイトルに入れて
ご住所・お名前・電話番号を
info2@woodtec.co.jpまでご連絡ください。

cue

04

【cue(キュー) = 手掛かり、きっかけ】

発行日 2017年6月1日
編集長 西村公孝
デザイン 鈴木信輔(ポールド)
イラスト 鈴木志穂 [P16]
発行 朝日ウッドテック株式会社

世界初のエレクトリックベース



名前の由来

バイオリンやチェロ等の弦楽器で正確な音程を出す(指板のどの部分を押しえるとどんな音程が出るか?)にはかなりの訓練が必要となります。1940代、ベースギターはバイオリンやチェロと同様正確な音程を出すのは困難なウッドベースが主流だった為、高度な演奏技術が要求されていました。

そうした中、1951年に世界初のエレクトリックベースとしてアメリカのフェンダー社より発売された「プレジジョンベース」は画期的でした。何故なら指板に金属性のフレットを打ち込む事で従来のものより簡単に正確な音程を出す事が可能になったのです。この事がプレジジョン(日本語訳=正確な)ベースの名前の由来になったと言われています。

発売当初の「プレジジョンベース」のフォームはテレキャスター(cue03号参照)を意識したものでしたが、1957年中旬以降発売となったものから現在のフォームとなりました。

ロックを支え続ける銘器

エレクトリックベースにおいて人気を2分しているのが今回取り上げた「プレジジョンベース」と「ジャズベース(cue02号)」です。多彩な音色を作れる事からオールラウンドな音楽に対応出来る「ジャズベース」に対してワンボリューム・ワントークというシンプルながら、そのパワフルで太い音の特徴の「プレジジョンベース」は正にロックサウンド向きと言えるでしょう。

「プレジジョンベース」の愛用者としてはスティング、ジョン・ディーコン【QUEEN】、ジェームス・ジェファソン、ドナルド・ダックダン等が有名です。



プレジジョンベースに使われている木材

エレキギターのネック材として代表的なものはメイプル材・マホガニー材・エボニー材ですが、エレキギターと比べてスケールが長く、より高いテンションのかかるエレキベースのネック材として最も優れているのはメイプル材です。

ネックには、指板とネックを1本の木から削り出す「ワンピースネック」とメイプルネック材の上に別の指板材(ローズウッド等)を貼り合わせるタイプのものがあります。

1951年に発売した初代のプレジジョンベースは「メイプルワンピースネック」だけでしたが、1957年以降発売されたプレジジョンベースからは「貼り合わせタイプ(ローズウッド+メイプル)」も選べるようになりました。

メイプル材を指板に使った場合、高域特性に優れているのでシャープでクリアなサウンドになります。又、メイプル自体非常に硬質な木材なので他の指板材に比べ手入れが簡単です。使っていくうちに飴色がかってくるのも多くの人を魅了している理由のひとつです。

ローズ指板は、音の立ちあがり非常に緩やかで、暖かみのあるサウンドとなります。発売当初はブラジリアンローズウッド(ハカラダ)が使われていましたが、1991年にワシントン条約で規制がかかって以降、インディアンローズウッド等が使われています。

ボディ材としては、1950年後半からはアルダー材、1970年以降はアッシュ材が使われています。木材による音質の変化は非常に重要で、1960年代中期以前に現在では稀少となった木材を手間隙かけた製造工程で作られたモデルは現在では非常に高価で取引されています。(文・相原)

1957年以前のプレジジョンベースを弾くスティング
(Wikipediaより)